

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2017.12.4
VOL. 72

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議
〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10
関ビル106号 NPO新宿気付
TEL.03-6826-7802 FAX.03-5273-6895
<http://www.tokyohomeless.com>

冬は

笠井和明

炬燵が恋しい冬となった。

部屋の中でさえ毛布を重ね、隙間をなくして横にならないと、なかなか寝入ることが出来ない。ましては路上では、である。

都内をぐるぐると走る山手線と、都庁下を起点に、ほぼ丸く走る大江戸線の車内に、大きな荷物を脇にするおじさんやおばさんの姿が目につくようになるのが、東京の冬が深まりつつある印である。乗車券はどうしているのか、などと野暮なことは考えず、この季節の、知る人は知る都心の光景でもある。

冬の公園に、あるだけの毛布を大型トラックで運び入れていた時代は終わった。必要とする需要の減少と共に、近年は高田馬場の事務所の衣類置き場に、毎朝、10枚ほど積み上げておくのであるが、雨の日であるとか、北風が強い日などは夕方には、その山はいつの間にか低くなっていく。毛布の需要がな



くなることはないのは、この季節の中、路上で寝ざるを得ない人が居続けていることの証でもある。

そりゃあ、寒風の中、寝たくはないが、しかたがなく、ゆえなく、である。

冬は来年の3月頃まで続き、所謂「厳冬」と云うのは、1月後半から2月にかけてであり、それは、雪のあまり降らぬ都会でも変わらない。まあ、近年は異常気象が続き、そこらの季節感は良く分からなくなっているが、それにしても、コンクリートを冷やし続ける冬は長い。

年末年始だけ路上の人々は寒くなり、季節的な困窮度が増すのではない。

支援者の都合だけに振り回され、一時の甘い思いだけで、寒空の路上に放り出され、後は週一回だけよ、月に数回だけよと突き放すことが越冬の取り組みであるなら、それは、それで、とても空しいものである。

しかし、クリスマスの日には路上に支援者の数にわかに増え、何かが貰える日と勘違いをさせる、そんな習慣は、本当にあちら側だけの都合なのであるが、救世軍の「社会鍋」の時代からずっと続いているのであろう。

悪い奴らに取り立てられ、夜逃げが増え、木枯らしに馬券が舞い、すつからかんになるのが、とても年末らしい「NHKドラマ」であるが、そんなイメージなのであろうか。

それとも、自分だけ暖かいところに居る富裕層キリスト教徒の罪悪感なのであろうか。

まあ、とにかく、寒くなり、年末年始になると、



「貧民救済」の気運は高くなる。

詰まる所は支援者の自己確認なのであるが、その尺度が、聞き齧りの政治に走って来たり、目立ちたがり屋のボランティア路線に走

って来たりと、路上の仲間の数が少なくなったのを良いことに、近年は、ちと極端化を歩んでいるようである。

おそらく山谷対策から始まった、「困窮者」を対象にした東京都の越冬対策は、元々筋がよくない対策だっただけに、現在、ほぼ、終焉を迎えつつある。しかし、「終り」と言うリアクションは怖いし、その根拠を求められたりもするので、予算を減らし、減らし、ソフトランディングを狙っているようである。

その一部を真似た都区の路上生活者対策の越冬対策＝「厳冬期宿泊」等も、同じく終焉しつつある。

「宿」へのニーズは冬期に高まることは知っているが、通年に対応しておれば、その枠を調整すれば良いのであり、別枠はあえて必要ない。

生活保護の「冬期加算」やら、日雇手帳の「餅代」とか、過去の経緯と、その時代の必要からつけたは良いが、時代と共に色々変化をし、何故つけたのかさえ忘れてしまったなんてことがないよう、気をつけているとも言える。

私たちの、かつての拠点型越年越冬闘争も、山谷であるとか、寄せ場の越年越冬闘争を正直に真似たものであるが、都区の路上生活者対策もまた、山谷対策を真似ながら、しかし、そうはならないと、反面教師にしているところもあり、どこか私たちのスタンス（真似の固定でなく、変化させている）と似ているのが面白い。

そもそも時代が変わり、人も変わる。それと共に数も変わり、ニーズも変わり、何やかんやと変わる。

行政の越冬対策が終焉しつつあるのは、需要の側面が大きいのであるが、自己満足でも支援をしようとする側が、それら変化に敏感でなくて、どうするのか、20年前のスローガンを後生大事に抱えていても、回顧趣味の人以外、誰からも相手にされない。まさに、自己満足の自己完結である。

当座のニーズの「解消」だけに徹するのは、かつて、行政が暴動対策として様々な給を提供したのと似ている。そこから先はないのである。

炊き出しを提供し続けても、そこから先は、意識的に作りあげない限り、ない。まあ、毛布もまた同じである。

その限界を知りながら続けているのか、知らずに舞い上がっているだけなのか、それだけでも違う。当事者からは同じであるが、支援する側の質は明らかに違う。東京都が一步前に対策を進めようとしないうと同じであり、そこに躊躇も、思想も何もないのとも同じである。

「ホームレス自立支援法」も残り10年に延長されたが、まだ働ける人は良いが、そうでない人はどうするのか、路上の「解消」とは、地域への包括であれば、そこら辺の課題がないがしろになったり、縦割りになってしまうと、道筋さえ見えてこなくなり、山谷対策と同じ轍を踏むようにも思える。

路上生活者にせよ、日雇労働者にせよ、不安定就労者にせよ、未組織現役層の最大の不安は、今の仕事が続くのか、身体がいつまで持つのか、そして高齢化した今、最大の関心事は老後の問題である。

まあ、高齢化した労働者には、生活保護一般ではなく、介護なども含めた全体の中で、どう生きられるかの具体的展望を創り出すことが、単なる対策ではなく、施策として必要なのは、高齢者福祉に取り組んでいる人びとの共通認識であると思うのであるが、その観点で、下層も路上も考えているのかと云うと、そこはいつも忘れ去られ、現象だけ蓋を閉めて、終わりである。

対策は所詮、対策でしかない。応急援護も所詮、応急でしかない。クリスマスも所詮、クリスマスでしかなく、年末年始も所詮、年末年始でしかない。冬は、冬と云う季節全体を見渡さなければならない。

そこで寝ると云うことを考えなければならない。昼だけではなく、冬の夜の冷たさを、この肌で感じなければならない。

しかしながら、資源がそれしかなければ、人がそれしかいなければ、それしか出来ない。しかも、資源があっても使えない資源であったり、人が居ても、まったく居ないのと同じであったりもする。

その葛藤の中、冬を迎える。その繰り返しに、我が手は震え、「まっすぐな線を引けない」。

葛藤すれば良いと思うのが、自己満足で、だからどうした、あるが、それにしても、我々は、ちと、虚しい。

そこに答えなどなく、冬は寒く、酒を呑んでも眠れなく、生命を削る。

都会の灯りは、暖かくもあり、そして、冷酷でもある。

「ホームレス自立支援法」の失効問題は今年最大の課題でもあったが、その最中に入院し、国会には行けずに、意識不明のまま静かに亡くなった坂本保氏（享年68歳）を追悼したい。

連絡会には必ず彼の姿があり、不機嫌そうな顔とは裏腹に、誰とでも親しく喋り、仲間を心配し、身体が動かなくなっても、生活保護を取って、高田馬場に暮らすことになっても、彼が居る限り、連絡会は未だあるんだと思わせるような、連絡会の歴史の中に空気の如く存在していた同志であった。

彼が支えて世話焼く人も少なくなり、それぞれが、それぞれの道を歩む中、役割終えたと思ったのか、それとも、つれない連中ばかりとぼやいたのか、僅かに余韻を残す去り際は、何とも見事であった。それにしても、養生さえすれば、もうちょっと永く生きられ、東京オリンピックをぶつぶつ言いながらテレビで見られただろうに…。

誰も知らないだろうが、俺らは知っている。そうやって、ある人がそこで生きてきたことは、どこと

なく伝承され、労働者の気質として、これもまた何となく、どこかで残っていく。九州の炭鉱町に生まれ、育ち、故が有ったのか、なかったのか、いつの頃だか新宿に流れつき、働きながらワンカップを飲み、働けなくなってもワンカップを飲み、誰かを捕まえ、ぼやき、ぼやき。

彼が世話を焼き続けて来た「麦の家」（借り上げアパート型支援）は、同様のことを行政が始めたので、その試みは、どうかこうにか、つながったとこのことで、今年、一端閉め、新たな「麦の家」（共同住宅、リビング型支援）が、ようやく、この冬から始まる。この転換を共に過ごし、「馬場ハウス」（シェルター）のよう、一緒に仲間が暮す部屋を作りたかったのであるが、まあ、それもままならない。

その代わり、あの世で、その壁を電動ドリルで破っておいてくれ。玄関からではなく、そこから、俺らは入るから。

冬は、仕方がなくやって来て、そして、いずれ去っていく。どう生き、どう死するかを、人々に問いながら。

まあ、「越年越冬」でも、「貧民救済」でも何でも良い。冬の間いかに真摯に答えぬよう、誰かが、その犠牲にならぬよう、路上に声をかけ続けよう。

それが、冬であろうが、夏であろうが。



1

17年の活動は昨年と大差なかった。

日曜日ごとに会う野宿者数は、減り気味で延べ平均210。うち156人へおにぎりを渡し、前年比20減。実数は144～165と、昨年のような200超えなし。

救急搬送の同乗1、死亡の報は行き倒れ1、搬送後2だった。

小康のなか、気になった話題を少し。

6月、某地点で水をかけられる被害が数回あった。車で乗りつけ、ペットボトルの中身をまいたらしい。路上にまつわる問題群の一つが「襲撃」と呼ばれる。軽微とはいえ、そこへ連なる出来事だった。

14年、新宿駅周辺で聞き取りを行った。30人に尋ね、類似の体験「ある」が7。主な内訳は「通行人」「酔客」による「暴言」「物の投げつけ」で、命に響くほどでなかった。路上を巡っていると被害の訴えは耳にするが、現場に居合わせるのは珍しい。言葉の嫌がらせは直面する。道端で話し込んでいると「邪魔だ」「無駄なことするな」など、言い捨てていく輩がいる。歌舞伎町の裏を仲間と歩き、風俗の従業員に一再ならず罵声を浴びた。

暴力は当人らの間でも起きる。14年は渋谷で、今年は墨田区で死者の出る騒ぎがあった。これらを基に、ホームレスをなべて「粗野」とするのは短絡すぎる。彼らは加害より被害にあいやすく、逃れる術に乏しい。有利なはずの多数派がむやみに恐れ、攻撃性に火がつく。「…質量とも圧倒的に暴力的なのはホームレスに対する『普通の』『マジョリティ』の側でしょう。しかし、にもかかわらずホームレスの方こそ恐怖の対象としてイメージされる」（酒井隆史『暴力の哲学』）。

襲撃の多くは若者によってなされる。非力でも、無防備な相手には勝ると踏む。徒党を組み、道具をそろえる。何より、多数の側に属するのが強み。80年代の例以来、逆転の構図が注目されてきた。「少年たちは学校では弱い立場にいたかもしれませんが。しかし街では『浮浪者』より強い立場にいたのです。…『一般市民』として考えてもらえる立場にはいたのです」（青木悦『「人間」をさがす旅 横浜の「浮浪者」と少年たち』）。

被害の本人へ「やり返したら」と問うのは酷だろう。「こっちが責められる」「外で寝ているせい」と、嘆き節がもらされる。路上を脱し大勢へなびけば、さしあたり危険は去る。それが苦手ゆえの現状かもしれない。ホームレスのまま、「弱い」まま無事ですむなら、そのほうがいい。

強さに焦がれず、弱さを反攻の足がかりに。「弱さとは、強さが弱体化したものではない。弱さとは、強さに向かうための一つのプロセスでもない。弱さには弱さとして意味があり、価値がある…」（浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論』）。

2

都心には人と物がひしめき、雑事をこもごも呼び寄せる。ホームレスは点景で、達観したかにみえ実は世俗と地続き。〈坑道のカナリヤ〉よろしく、摩擦や矛盾が先駆的に噴き出す。あげく「野宿(だけ)が危険か」の逆説が成り立つ。

暴力は屋内で激化、恒常化する。今年8月、千葉の施設で困窮者の虐待死を疑わせる事件が起きた。学校・職場・病院は温床の観すら漂う。女性の野宿では、元の生活との安危の比較が欠かせない。「DVの被害者たちは、家庭よりも見ず知らずの人間しかいない街頭の方がまだ安全だから、家庭から逃げるという選択をする」（小倉利丸編『路上に自由を 監視カメラ徹底批判』）。

室内の危険の典型に、火災が挙げられる。数年来、生活保護の受給者を巻き込む5～10人単位の焼死が相次ぐ。一覧は以下の通り。09年3月、群馬渋川、高齢者向け施設。11年11月、新宿大久保、アパート。15年5月、川崎、簡易宿泊所。17年5月、北九州小倉、アパート。同8月、秋田横手、アパート。犠牲の度、住環境のまずさが指摘される。違法まがいの建築、木造密集、避難訓練や消火設備の軽視。

糾弾すれば足りるわけではない。かつて渋川の施設を離れ、路上へ戻った男性と接した。いびつな増改築をなじる反面、管理責任のNPO理事長に好意的な評を下した。川崎のドヤが焼ける二ヶ

月前、ある人の投宿先を訪ね周辺を歩いた。清潔な雰囲気、帳場はみんな親切だった。そもそも、社会的に負の条件は選択肢が狭まる。施設ならいざ知らず、アパートでは無作為に。

大久保の火災後、地域で追悼集会が開かれた。出席者から、生き残った住民の「ほかに移りたくても似たようなアパートしかない」の声が紹介された。別な人が付言した。そういう空間ができあがるのは最善でないにしろ次善、さもなければ「必要悪」だと。率直な物言いに共鳴しつつ、もどかしさが募った。

3

少年らの襲撃をなくすべく、支援者が取り組んできた。小・中・高校で授業し理解を促す。地域によって、はっきり成果を得た。

要所では、偏見を和らげる調子で論ず。「…生まれながらにして『ホームレス』という人もいない…いろいろな不運が重なって、いま家がない状態、いま職がない状態になってしまった。…大事なのは『状態』というのは『変化』するものということ」(生田武志、北村年子『子供に「ホームレス」をどう伝えるか』)。

学生にとって、この説明はなじむと思う。いずれ卒業し、進学や就職を目指す。将来を見据え、彼らは常に変化の兆しのうちに育つ。ホームレスも事情は同じ、路上はかりそめ通過点。

難しいのは、野宿の側がそう実感できるか。支援活動に学生ボランティアが加わり、よく「いい経験をした」と感想を述べる。ちょっとした表現に彼我の違いがのぞく。ホームレスはそれを「経験する」のでなく、不断に「生き(続ける)」。

寄せ場の運動へ学生(あがり)が携わり、やはり隔たりが意識された。「…転生できる人間=学生ということである。…転生できない存在としての労働者が転生できる者の犠牲になることは、この地域では真理というより事実としてある。だから労働者は本能で『学生』を嗅ぎわかる」(寺島珠雄編『釜ヶ崎語彙集』)。

労働者のこだわりを、頑迷と切り捨てるのはためらわれる。対人援助の機微に触れるかもしれない。「ケア関係というのは非対称なものです。…ケアする者はケアという関係から退出することができますが、ケアされる者はそこから降りることができませ

ん」(上野千鶴子『生き延びるための思想 新版』)。

もう一つ、微妙な点を。後天性を理由に啓発するのは、生来の不利を暗黙の劣位に置きかねない。ある種の疾患は先天的で、解決不能とみなされやすい。予測と回避の技術が編み出された。

事後の負担や差別が減るかわり、あらかじめ存在の可能性が除去されている。「…優生学というのは人間の淘汰と選別を、その出生前に移行させる…障害者がすべて生まれる前の段階で淘汰されるならば…成長した段階での人間の選別を軽減ないし緩和できるからです。そういう形で福祉国家と優生学は結びつきうる」(立岩真也『弱くある自由へ』)。

4

16年7月、神奈川県相模原市の施設で、19名の命が奪われた。元職員の犯行と目され、短時間に重度の者ばかり狙った。衆院議長へあて、予告めいた文書を持参していた。

事件を受け、様々な議論が交わされた。入所の規模、防犯体制、(元職員の既往から)措置の是非、脱施設。世の風潮が俎上にのぼった。路上の襲撃では背景として、野宿を封ずる地面の突起やベンチの仕切りが言及される。直接の暴力は、隠然たる排斥の写し絵にほかならない。もっとおぼろな底流がありうる。

例えば、誰かが長期療養型の病院へ入ったとしよう。意識が薄く、キーパーソンに急変時の同意が求められる。胸部圧迫やAEDによる処置をしない。蘇生してしまうと高度な延命が始まり、苦しみを長引かせる。人生の質を配慮した判断です。たぶん主治医はそうやって勧める。反対しづらく、付き添いはうなずくのみ。



すぐ横に「QOLのわな」が待っている。「…最初の指標は『延命可能かどうか』だったはずなのに、いつのまにか『QOL』へと指標がシフトし…医療現場にも一般社会にも、『重い障害のためにQOLの低い生は生きるに値しない』…という価値観が広がっているのではないだろうか」（児玉真美「事件が『ついに』起こる前に『すでに』起こっていたこと」/『現代思想』44-19）。

誘因は広域で働き、時に背く者たちがいる。福祉を拒むホームレスや帰化せぬ在日といった。彼らに対し、一部の視線は冷たい。結果の責めを自ら負えと脅す。敵意が煽られる遠因かもしれない。としたら、前もってくぎを刺しておかねば。「…その属性を持つ上で自己決定の余地があったことがヘイトスピーチ／クライムを正当化するような社会で、まともな自己決定などできないということもまた、確かである」（明戸隆浩「『これはヘイトクライムである』の先へ」/『現代思想』同）。

多様性を認めるのは骨が折れる。差異は容易に二極へ分かれる。上下、強弱、正邪、美醜。どこに線を引き、どちらへ属すか。少しでも優れた側へ。憎しみの底に、そんな志向が透ける。「優生とは、おそらく、ありとあらゆる意味での、線引きの暴力である」（杉田俊介、立岩真也『相模原障害者殺傷事件』）。

線引きの外縁が「国籍」という枠。どれほど厚い再分配も自国内に限られ、一線を越すのは工夫がいる。最近の政治では、次の発言のほうが票を稼ぐ。「…自分の帰属する場所とは、自らの国をおいてほかにはない。自らが帰属する国が紡いできた歴史や伝統、また文化に誇りをもちたいと思うのは、だれがなんといおうと、本来、ごく自然の感情なのである」（安倍晋三『美しい国へ』）。

5

国より小さく、身近な範囲で自他の線引きが生じる。暴力は普通、自らが他人へ害をなす。襲撃について考える際、他者性の問題は重要な示唆を与える。「…『他者とは何か』という問いは、最もラディカルな場合、共同体ではない『社会』とは何かという問いの形を取る。…日本社会はそれまで見なくてすませてきた外部に『ホームレスが隣人になる』という形で直面するようになった」（生田武志『<野宿者襲撃>論』）。

暴力には、自他の区別がねじれる現象が混じる。極端なものでは自傷・自殺。また事件後、容疑者知己の「まさかあの人か」と、残忍さに驚く様子が伝わったり。これらを含め、複合的な把握が導かれる。「暴力を行使する者は…犠牲者が他人であっても、自分自身であっても同じことだ。暴力のシステムに主体化＝服従することで、彼／彼女は暴力の犠牲になり、自分自身が被害者であることを通じて他者に対して加害者となる」（上野、前掲書）。

自らを他者化し、疎外を別の他者（あるいはすでに別人になった自分）の心身へ差し向ける。暴力の過程を、こう抽象できる。誰一人自分がいない、険しい景色が浮かぶ。悪循環を抜けるのに「自分を保つ」毅然さがふさわしく思える。しかし「強くあれ」の掛け声は、往々にして「正義の」「理性的な」暴力を招く。究極が死刑制度や戦争、核武装。もっとまじな道に賭けてみたい。

社会生活を送るうえで、自らを貫くのは当然に映る。福祉の発想もほぼその前提に沿う（自一立支援）。一方で日々、自他の境を揺るがせ営まれる次元の状態がある。そうした告白を聞く機会はまれで、本当に貴重だ。「僕たちは、見かけではわからないかもしれませんが、自分の体を自分のものだと自覚したことがありません」（東田直樹『自閉症の僕が跳びはねる理由』）。

自分の中に違和を抱え込むのはつらい。抑えが効かず引っかき、かみつぎ、頭突き等の自傷・他害が突発する。経験上、その率は絶対に高いとまでいえない。環境に留意し、いわば「弱さ」と折り合って過ごす。非暴力の原点をここに探るのは身びいきだろうか。「…自ら苦難を受けることは非暴力の本質であり、他人に対する暴力の選ばれた身代わりである」（マハトマ・ガンディー『私の非暴力I』森本達雄訳）。

居ながらにして他者性を生き、弱さに踏みとどまる。そんなメッセージが絶えず発せられてきた。一つだけ披露しよう。ずいぶん昔にある人が書き記し、繰り返し引用される。

機知に富み、かつ今日的。「自分の国を美しく思うのは、まだ半人前の青二才。至る所に故郷を見出す者は、もう十分にたくましい。しかし完璧なのはただ一人、どこにいてもそこを異国と感ずることだ」（ユーク・ド・サン＝ヴィクトール）。

9/3

夏のない夏が終わった。東京も雨の多い夏だったようだけど、いろりん村も雨ばかりで気温が上がらない日が多かった。野宿の方々にはつらい雨の夏だったかと思うけど、百姓もそうだ。何といってもお天気してくれないと野菜の出来も悪いし、お米も不作になってしまう。

昔から「百姓殺すに刃物はいらぬ、雨の三日も降ればいい」なんて言われたもんだし、「百姓」を「土方」に置き換えたりもしてた。太陽が出れば汗だくで、雨が降ればずぶ濡れで、その点ホワイトカラーと呼ばれた会社員の皆様はうらやましい。いつの間にやら泥にまみれて日に焼かれての仕事は蔑まれることとなった。でもね、俺たちには自然に近いところに生きている楽しさがあるんだよな。

いろりん村では日が出たら働いて、日が沈んだら寝ていられる。季節に擦り添いながらの作業をこなして、正月にはモチ食って夏の朝にはもぎたてトマトをかじって、旬のものを食べて暮らす幸福感がある。とは言っても、今年の野菜の出来はまるでだめだ。やっぱりお天道様に活躍して頂かないと、人間なんて小さなもんだ。併せて今年の夏は宿泊小屋の茅葺き工事にばかり集中して畑がおろそかになった。近所の年寄りも、農作物には何といっても人の手が大切なのだという。つまり、自然と人間のコラボレーション、共生関係が大切だ。小さな小屋は大きな茅葺屋根が葺かれてかなりグレードアップした。「農場」としてなかなか成果を出せないいろりん村だが、着々と整いつつある。

ちうご期待ってところだ。

10/8



いよいよ宿泊小屋が茅葺屋根になりました。快適です。天井が高くなったので囲炉裏の煙も上に逃げていき、狸みたいに煙に追い出されることもなくなりました。8月に始めた茅葺作業は2週間ほどの工期を予定してましたが、完成したのは冬の気配も近づく10月に。オリンピック関連施設の建設だって、完成が遅れているというニュースがいつも出てくるくらいだから、建設工事というのは工期が遅れるのが当たり前なのかもしれない。オリンピックのために建てられた巨大な施設は将来の遺産になるという名目でお金をジャブジャブ使っているが、汗をジャブジャブ流して建てた小さな茅葺小屋も集落にとって大きな遺産になります。

その茅葺小屋の裏にダイコン畑があります、新宿に届けようと栽培しているダイコンもすくすくと育っています。吹けば飛ぶよな小さな種が発芽して、大きな葉を付けて白い根がぐいぐいと地下に向かって順調に伸びています。炎天下、ふらふらになりながら鍬をふるって、土中から出てきたミミズを何度も除けずにそのまま鍬を突き立てようと思うのをこらえて（とにかく暑かったのです）、丹念にミミズを土に戻して良かった思う。今、ミミズたちが土壌を豊かにしてくれているのです。ミミズ偉い。

ダイコンの収穫は一か月ほど先ですが、その前に「いろりん村」がある集落では稲刈りを迎えます。刈り取った稲を干すはざかけ用の稲木が集落のあちこちで組み、稲刈りの準備も進んでいます。集落全体が稲刈りムードで、年間通じて最大のイベント来たるという雰囲気です。まだ、残念ながら「いろりん村」専用の田んぼがありません。集落全体が稲刈りムードのなか、少し寂しい思いがします。来年から少しづつ耕作放棄されている田んぼを復元して、「いろりん村」の田んぼを持ちたいと思っています。畑も増やしたいし、草を刈らないといけない場所も沢山あります。

田んぼを復元し、田を耕し、草を刈る、すべて「いろりん村」だけの財産になるのではなく、きっと数十年先には集落にとっても大きな遺産になると思います。今やっていることが、数十年、数百年後につながっていく、そんなことを茅葺屋根の隙間から出てくる囲炉裏の煙を眺めて夢想しています。夢想仲間を少しづつ増やしていけたら良いなと思っています。是非、「いろりん村」に行ったら茅葺屋根と一緒に眺めてみませんか。



2017~2018

新宿年越活動

2017年12月29日(金)~2018年1月3日(水)

<ところ> 新宿の路上など

おにパト準備 29日~3日まで13時より高田馬場事務所
 ミーティングは29日~3日まで16時より高田馬場事務所
 医療班+おにパト巡回 31日を除き連日実施
 餅つき大会29日(高田馬場事務所前)、年越し祭りは31日
 (新宿中央公園)、臨時宿泊施設も用意し、緊急搬送24時間。
 今年もひたすら歩き回り、仲間の生き末を静かに見守り、支えます。

主催・新宿連絡会03-6826-7802

新宿連絡会 会計報告

この間のご支援、大変ありがとうございます。この冬もまた、精魂込めて動き回ります。引き続きのご理解とご協力、お願い致します。

2016年度新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	165,606
1 寄付金収入	2,958,105	事務用品費	43,014
		事務所分担金	480,000
計上収入合計	2,958,105	衛生管理費	108,260
		支払手数料	178,954
II 計上支出の部		車両費	404,022
1 事業費		修繕費	86,400
弁当おにぎり事業	954,540		
越年越冬事業	553,246	計上支出合計	2,750,776
その他活動事業	0	計上収支差額	207,329
2 管理費		前期収支差額	△499,378
旅費交通費	39,150	次期繰越金	△292,049
通信費	277,886		

2017年度 4月~10月新宿連絡会収支報告

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	25,920
1 寄付金収入	1,230,120	事務用品費	7,309
		事務所費分担金	280,000
計上収入合計	1,230,120	衛生管理費	9,500
		支払手数料	28,756
II 計上支出の部		車両費	180,458
1 事業費		修繕費	0
弁当おにぎり事業	374,306		
越年越冬事業	0	計上支出合計	949,209
その他活動事業	29,670	計上収支差額	280,911
2 管理費		前期収支差額	△292,049
旅費交通費	8,730	次期繰越金	△11,138
通信費	4,560		

●活動カンパ

振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.giveone.net/>「Give One (ギブワン)」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけて下さい。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。